

二次元3Dち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS



岩重十郎太
表紙/友屋勘九郎

学園対魔捜査官
外伝
斎藤 綾乃

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『学園対魔捜査官 斎藤綾乃 外伝』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『学園対魔捜査官 斎藤綾乃』『学園対魔捜査官 斎藤綾乃2』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともに読みいただけますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



学園対魔捜査官
斎藤綾乃
外伝

岩重十郎太
表紙 / 友屋勘九郎

登場人物紹介

Characters

さいとうあやの
斎藤綾乃

対異形治安委員会・潜入捜査室学生班所属の対魔捜査官。これまで数々の魔物が巣食う学園に潜入し、魔を討滅してきた実績を持つ。クールで寡黙な女捜査官。

整然とした廊下の一角で、対魔捜査官・齋藤綾乃さいとうあやのは後ろ手に扉を閉めた。

構内はグレイを基調としていて、蛍光灯の白光とともに薄ら寒い印象さえある。長い廊下と、単調に並ぶ扉。平面的な造りは有り余る広大な敷地の為だろう。建物の外には高原と、海があつた。更には夏の青く広い空。遠方に連山。

(見事なまでに、調和しているけど)

扉を背にしたまま窓外を眺めて、綾乃はつい溜息を吐く。

ここは、所謂サナトリウムとも言うべき施設なのだった。いま、綾乃は現役から予備役に退いて、夏の高原に身を置いていた。

一日二日逗留するなら、それも自分の意志であれば尚更、よい避暑地に違いなかつた。風と空調のお陰で屋内が二十三度を越えることはない。湿度も調整されている。

(でも、暑くって)

襟を指先でツンと直す。と、服の中に籠っている熱気が薄い隙間からムツと零れて少女は顔を擧めた。暑いというよりは、熱いのだ。体奥から滲み湧く、あの例の暑熱が容赦なく身体と精神を灼いて、空調など意味を為さない。見れば、上衣は汗で透けかけている。

綾乃が身に着けているのは女性捜査官制服の夏仕様で、白いブラウスと濃藍のタイト・スカート、ダーク・グレイのストッキングに黒のパンプス。揃いの濃藍のネクタイ、白サテンの手袋を正しく着用して、装いは如何にも官吏という印象だ。とはいえ夏仕様だけに

爽やかな反面、シルエットが露になり過ぎる難点もあった。

ただでも最近の綾乃からは元々の戦闘的な、流れる様なスレンダー・シルエットが後退して、官能的な曲線美が目立っているのだ。

官給のブラウスは、美乳の柔らかさを押し隠すには薄過ぎる。双乳の狭間に垂れる濃藍のネクタイが円い優線を描いて、肥大した胸の膨らみを一層強調しているのが気になった。ブラウスをしまったスカートの上裾も美の強調点だった。豊かな双乳から加速度的に細くしなやかさを増していく腰へのラインを際立てる感じで、胴回りを余したブラウスの裾が、スカートの中へ皺を寄せながら吸い込まれていく。そしてその鋭角的な細腰は、ヒップの丸みを鮮烈にしてしまう。サイドから見れば尻肉のポリウムは如何にも官能美に漲っている。或いはバックから見れば、丸みの作る下影がいざないにも感じられた。

そして、鍛え上げられた肉腿の張り詰めた美線がタイトなスカートに隠し様もなく浮き上がっていて、これも酷く挑発的だった。

(この施設で着るには刺激が強過ぎるかも、ね)

療養しているのは皆、異形との前線で淫気に囚われた委員会の職員だ。

もつとも、施設に於ける治療がもう少し緩やかであったならば、「刺激」など気にする必要もなかっただろう。しかしここは傷付いた戦士を癒す保養地などではなく、縫い痕だらけの前線へ戦力を至急送り返す為の再整備基地なのである。

（擦れ違う男たち、誰も彼も）

係官と休養者とを問わず、通路で行き交う者たちの異性を見る目は異様だ。だが、それがある程度已む無いものであることは、いまや綾乃もよく知っていた。

ここは淫気に克つ者だけを拾い上げ、敗れた者を下層へと捨て落とす機関なのだった。休養者には毎日淫気が投与され、その上で訓練と禁欲が強いられる。

環境に堪え、係官のお墨付きを得られれば再び現役に返り咲き前線へ戻されるが、堪えられなければ予備役の籍も剥奪され、更正医療室に移送されてしまう。それは捜査官として以上に、市民としての権利を奪われるということだった。病室には内側からは開けられない鉄柵が設けられているのである。

（でもこのくらい、昔日の異形を討った代償と思えば）

ここにきてから何度も繰り返した言葉を反芻して、だが少女は緩やかに首を振った。酷いものだ。空気は爛れている。休養者は、男なら股間を持って余し、血走った目で女を睨む。女なら内股に歩きながら行き交う男の股間に目を走らせる。女性係官は誰に対しても冷笑的で、汚らわしいものを見る視線を送る。男性係官は男性休養者をあからさまに避け、若い女性休養者には暇さえあれば色目を使っている。

（最低ね、この世界は）

二週間のときを過ぎてみて、それだけはハッキリと言えた。溜息を吐く。息が熱い。

注入された淫気はひとときも休むことなく少女の身体を焦がして、唇を引き締めていなければ遣り過ごすことなど不可能だ。

西方へ、夕陽が落ちていく。長い夜の始まり。

注入された淫気は明日の朝まで効果を失わない。

長い廊下に仮の自室まで、一步を踏み出す。パンプスがコツリと音を立てて、その振動にさえゾクリ、身体が痺れた。

(これだけは、慣れられない)

いや、慣れてはいけないのだ。体内の不協和音に苛立ちを覚えることこそが、正常の証なのだから。

(そう、慣れられなくて、いいのだけれど)

僅か三十数歩、進んで少女は廊下の壁に凭れた。

右肩から身体を預けると、湿ったブラウス越しに壁がヒヤリと心地いい。そのまま四分の一回転して額を壁にヒタとつけると、脳が冷却される様な清涼感。それでも身体は茹だる暑熱に喘いで、機能を低下させ、再び歩き進む気力を奪ってしまう。

(このまま、暫く……)

自室に戻る時間は定められている訳ではないから、ゆっくり回復を待つのも悪くはない。そうして一分、二分、壁から深々と伝わり続ける冷気を楽しんでみると、側方、数メートル

ルに扉の音がした。

途端、淫欲の気配。一人。俄かに猛っているから男性休養者だろう。

施設に入営以来、頻々と浴びせられている獣の情欲を左から浴びて、少女は無視する。なにもかも、遣り過ごすのが最も賢明なのだ。互いに刺激を避けて、脱落を回避しなければ、転落は背後に間近い。

足音が近付いてくる。左から、真後ろを過ぎ、右へ。極彩色の獣欲とともに足音は去り始め、強圧感が和らごうとする、その、中途。

(……立ち止まった)

音が絶えた。同時、綾乃の内側にけたたましく警報が鳴る。恐らく、これは異常事態。そして次の瞬間、脱兎の勢で男が掴みかかってきた。

「畜生！ もう限界なんだよお！」

獣そのものの瞬発力で掴みかかれて、警戒していた筈なのに、綾乃の反応は遅れていた。(拙い……っ！)

壁に押し付けられ、タイト・スカートの裾が掴まれる。抵抗しなければならぬのに、背後に密着した男の濃密な淫気が肌や粘膜から大量に少女の体内に侵入してきて、矛先が鈍らされる。実際、誰もが限界なのだ。際どく成り立っている均衡など、崩すのは容易い。「この匂いだよ！ この感触だよ！」

喚き声が耳を圧して少女の吐息を上擦らせる。淫気に炙られ続けた綾乃の体臭が、吸い込まれていた。刺激を求めて止まない身体が乱雑に撫で握られた。

（く、淫気が、濃くて……っ）

額を壁にあてたまま、押し付けられた身体を支える様に両の手をも壁についてしまうと、開き加減の下肢と相俟って、後ろ姿は余りにも無防備だ。

「お前だって堪えらんねえだろ？　こんなところ！」

掴まれた裾が引き摺り上げられて、ダーク・グレイのストッキングと、透け見える白下着に包まれたヒップが露になる。同時、ファスナーを下げる音。衣擦れが聞こえるとともにムツと昇ってきた淫臭に、鼻腔が侵された。

（この、匂い！）

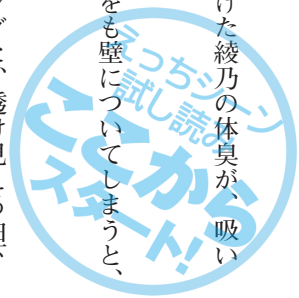
記憶が刺激されて、脳内に渦が卷く。厄介だ。だが受け入れてしまったが最後、廃人生活に転落する。

だから氣力を振り絞って抵抗しようとして、それよりも早く。

「……ひ、」

綾乃はギョッとさせられていた。

ストッキング越し、腿の裏に押し付けられたのは、熱くぬめった淫猥な勃起。その硬さが、熱さが、少女の心臓を刺し貫いて、能動を封じられる。



「うお、ストッキングがたまんねえ……ッ！」

サテンと先走り汁とにヌルリと滑った勃起ペニスが二本の御御足の狭間に入り込んで、男が呻いた。

(う、硬くて……っ)

左右から腿肉で挟み、上から柔肉で撫で、勃起ペニスのすべてが感じられてしまう。細腰までたくし上げられ、臀部も、足の付け根さえも露になっってしまった下肢は、籠りまくった淫熱を放出しながら一層の熱気に霞んでいく。

「なあ、もつと挟んでくれよお！」

左右の手をはたく様に細腰に添えられて、訴えられる。応じる訳にはいかない。それでもバツクから下肢の付け根を突かれると、ゾクリ、身体中が痺れてしまう。

(ダメだ、感じるな)

爪先に力を籠めて、両足を狭めてしまわない様に踏ん張る。押し掛かる男に力強さが増していく。細腰を掴む手の握力。思い切り腰を振られて、突き出され、引かれると、ズルリ、勃起ペニスに腿肉を挟られ、柔肉を擦られる。

(やだ、先っぽの形まで、分かってしまっ……っ)

ヌルヌルに穢されながら、何時の間にか亀頭の形さえ、頭の中で描いてしまう。その亀頭で柔肉を集中的に擦り立てられると、脊髓を震えが走ってしまっ、思わず熱い吐息を

捨ててしまう。

「もうこのままでいい！ 出すぞ！ 出すからな！」

男が耳元で喚く。宣言されて、あの獰猛な噴出が脳に閃く。

（射精、される）

ドロリとした、臭い、醜悪な行為を反芻して、少女のこめかみがツンと痛んだ。嫌悪が湧く。畏れも湧く。抵抗しなければいけないのに。

（こんな、狂人に）

口惜しさが不意に、込み上げてくるのだ。こんな墮墜した男にさえ無抵抗に貶められてしまう自分が、情けなかった。しかも勃起ペニスに擦られるたび、瞬きに似た性感にさえ見舞われてしまっている。

「だ、出すぞ、俺のを……！」

（最低！）

強く念ずる。亀頭が柔肉に食い込んで、感覚に少女がフルリ、震える。

それが引鉄と化して、強く、傲慢に、後ろから押し掛かられた。

ビュクッ！ ビュルクッ！ ビュ、ビュッ！

「んあ、つ、……っ」

二重の薄布でも防ぎ切れない灼熱が柔肉に浴びせられて、唇から吐息が漏れる。

ピュクッ！ ビュ、ピュクッ！ ……ピュビュッ

（こんな、……沢山）

長期間溜め込んでいたに違いない精液が、柔肉を包むストッキングを汚し、白下着にまで浸透して、湿った熱で少女の下腹部を冒していく。たわんだタイト・スカートまで表裏を問わずかけられて、黄濁した濃密汁に穢される。

咽そうな匂い。

吐き気を催す、陶酔の熱気。

「……う、これじゃ、……」

抵抗など、できる筈もなかった。綾乃もまた、淫気を注入されては禁欲を強いられる生活を、営まされているのだから。

眼下、黄濁汁に塗れた自分の狭間から、尚硬度を保つ勃起の亀頭が垣間見える。

「……あ」

凝視して、なにか口をついてしまいかけて、辛うじて飲み込む。

脱落と墮墜の予感に目を瞑る。

だがそのとき、背後の男から唐突に、力が抜けていった。

（？）

動かない身体に鞭を打って後ろを向くと、床に崩れ去った男の代わりに、一人の女性が

立っていた。手には注射器を持っている。

「危ないところだったわね」

女性はこの施設に勤務する係官だった。治療を担当するが不測の事態に備える為、制圧用の武器を常備している。薬品を使う手は、ここにしては比較的穏やかな部類に入るものだった。

「この男はこれで更正室いき。アナタも気を付けたほうがいいわ」

たったそれだけ言い残して女は廊下を歩き去っていく。その後ろ姿を壁に手をついたまま嘔然と見送っていると、女性係官が呼んだのだらう、複数の足音が急速に近付いてきて、綾乃は慌ててスカートを直した。

夜の帳が下りると、施設には急速に静寂が広がって、駄々広い敷地には一層の虚しさが漂い始める。

明かりは点々と灯されているものの、どれも職員の私室か設備かで、休養者の部屋から漏れる明かりはまったくない。二十時をもって消灯時間と定められている生活の為だが、気を紛らわすものがない闇の中で、夜は昼以上に苦痛の時間帯だった。

起床後暫くして注入される淫気の効果は、ほぼ二十四時間。

六時半の朝食とともに淫気を施されることを考えれば、二十時はまだ、一日の折り返し点を幾らか過ぎたに過ぎないということになる。

休養者は体内に興る淫欲を或いは無視し、或いはなだめて、ひたすら夜明けを待たなければならなかった。そして朝は、次なる二十四時間の始まりに過ぎない。

(あんなことがあったから……)

八畳間の一角に置かれたベッドの上で、斎藤綾乃は自身の不運を白い天井に向かって呪ってみせた。

いまも、あの匂いが脳にこびりついている。或いは浴びせられた獣欲もまた、鮮明に思い出せる。

夕方、狂った男性休養者に襲われた、その爪痕が生々しいのだ。

(寝付ける訳……、ない)

薄いダウン一枚に身体をくるんで、ジリジリと湧く汗を感じながら、不動の姿勢を維持している。両腕は頭の下で組んでいる。不吉な衝動を抑える為、すっかり慣習になってしまった寝姿勢だ。

(そう、手はしっかり押さえつけておかないと)

ここは、監視下にある。

見上げた天井の中心に、黒くコーティングされた半球体が薄闇の中に鈍い光を反射させている。それがカメラだった。

そして監視されているのは、この八畳間だけではなかった。同じものが隣接しているシ

ヤワー・トイレ室にもまた設置されている。それから通路その他、施設内の各部屋にも。

(見られていない場所なんて)

どこにもない。

そう自分に言い聞かせながら、少女は腕を頭の下に組んだまま横を見る。殺風景な部屋だ。調度はベッドと洋服ダンスと、ワーキングデスクだけ。そのデスクの上、時計を見れば、現在は零時二十五分。消灯からほぼ四時間、綾乃はこうして袋小路に向きあう様にながら天井を眺め続けていたことになる。

「ふう……」

溜息を吐く。息が熱い。ピクピクと、頭の下で十指が蠢く。不吉な衝動が身体を時折、こんな感じで舐め去っていく。それに気付かない振りをしながら天井に視線を戻す。夥しい汗が背中に横溢して、身体が湿りきったリネンの中に沈没するかのような感触が、不快さのピークを迎えようとしている。

そろそろ、立ち上がらなければならなかった。如何に空調が効いていようとも、夏の夜をこんな環境で過ごせる筈はない。

「……涼みにいこうかな」

断りを入れる感じで呟きながら、少女は緩やかにケットを剥いで半身を起こした。足を落とすとフローリングの床がひんやりと冷たくて一息入る。それでも全身を覆った脂汗が、

茹だる熱気を作り上げている。

(酷い、湿度)

身体は、油膜にコーティングされているかの様だ。身に着けている布は少ないのに、纏わりつく暑熱が綾乃の神経を逆撫でしていた。

着ているのはワンピースタイプの夜着一枚。くすんだホワイトは薄手の綿ニットで夏向きだが、いまでは汗を吸って酷くネットリとしてしまっていた。

ワンピースは肘上の半袖、腿半ばの三分裾だから、立ち上がれば、貼り付いて浮き上がってしまったシルエットとともに少女を刺激的に見せている。しかも発情した肉体を持って余した美貌はどこか虚ろで、それが一層対魔捜査官らしからぬ妖艶さを醸していた。

(シャワーなんて、効果はないし)

チラと八畳間の片隅、水周りに続く扉を見遣り、切り捨てる。

入営した頃は、冷水を被って気を紛らわしたりもしたものだ。だが、そんな付け焼刃は長続きしないと、いままではもう知っている。

少女は夢遊病めいた足取りでスリッパを引っかけ、ドアノブに手をかけた。

平たい廊下を幾らか歩いて到達した建物の南側、日中であればよく陽のあたる位置に、張り出し型の中二階が存在している。いわゆる物干し場のスペースで、廊下から続く段差を越え扉を開けると、一陣の風とともに視界が開けた。

「涼し……」

目の前にはタイル張りの、四十畳ほどの場所が広がっていた。無論、誰もいない。ここには幾つもの物干しが寂しく打ち捨てられている。手入れの怪しい鉢植えが点在している。前方には緑を経て海が見える筈だが、いまは闇に紛れて判別できない。斑の雲に星明りを遮られた夜らしかった。

（この隅なら）

炎獄の淫気に侵されながら、抜け目なく施設を窺っていた対魔捜査官の性質が、不意に首を擡げる。

網の目に巡らされた監視装置だが、探査すれば、実際には目の届かない場所もあるものだ。例えば開けた扉の陰に隠れば、なにをしようとカメラには見えはしない。ただ長く姿をくらましてしまえば、当然疑念を呼ぶことになる。

（でも、上半身だけ見えているなら？）

淫気との闘いにくたび果てた頭が、尚も高速に回転する。

カメラの位置をつぶさに観察すると、下半身を巧妙に隠すことのできる場所が、存在するのだ。

ゆっくり、ゆっくり、火照った身体を冷ます夕涼みの風情で、闇に沈んだ遠景を望みながら、歩き出す。

アテなどなさそうに。ランダムを装って。

何気なさそうに辿り着いたのは、灰色の欄干だった。下を望めば数メートル垂直に落ちて、草地に続いている。さほど危なくもない立地にも関わらず、施設の性質による為か、柵は首の高さに設置されていた。

「さて……」

呟きを捨てる。視線は虚空を彷徨う。何等目的など持たない様に見せかけながら、少女は両手を鉄の欄干にのせた。

(間違えてはいない筈)

監視装置の配置はもう頭の中に叩き込まれている。今更確認などせずに確信する。ここは上半身、おおよそ胸から上しか映らない場所だ。左右と背後には物干し台や鉢植えの枝葉がそびえて、少女の姿を巧妙に隠してくれていた。

(……ドキドキ、してきた……)

監視の及ばない綾乃の下肢の直ぐそばには、細い鉄の棒が位置しているのだ。タオルなどを干す為に配されているそれは、丁度跨げるくらいの高さだった。と、いうことは。

(……やっつと)

肘まで欄干にのせ、顎をついて遠望の姿勢を取りながら、少女はゆつくりと片足を持ち上げた。ワンピースがずり上がって、それすらも新鮮な感覚。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>